



学校法人鶴川学院
農村伝道神学校
発行人 高柳 富夫

**安全保障関連法廃止！
辺野古新基地建設反対！**

「神とは何か」

マルコ一章一四―一五節

校長 高柳 富夫

本田哲郎神父は『小さくされた人々のための福音書』で、当該マルコの言葉を「時はみち、神の国はすぐそこに来ている。低みに立つて見なおし、福音に信頼してあゆみを起こせ」と訳しています。この翻訳はマルコが伝えるイエスの言葉を、それがいかなる意味で言われているのかを鮮明に、しかも私たちへのかなり挑戦的な問いかけとして、示しています。

私たちは「福音」という言葉をしばしば耳にします。私たちがよく口にするのではないかと思います。まるで「福音」と言えば、その内実を誰もが同じく自明のことと理解しているかのごとくに、この言葉を用いているのではないのでしょうか。そういう私たちに対して、

本田神父の翻訳は、イエス・キリストの福音とは、キリスト者であれば誰もがすでにわかった自明のこととできるものではないことを、鮮やかに示しています。「福音」とは常に新しく、私たちの生き方を問いつづけるものであることを、明示しています。「低みに立つて見なおし、福音に信頼してあゆみを起こせ」とは、私たちの向きを変え視点を変えて、考え直し見直し、新しい歩みを起こすことなのだと示されるのです。

私は、新入生の「志望の動機」や「答案」を読んで、お二人の志が、自分の生き方の「向きを変えたい」「生き方を変えたい」という真摯な願いに基づいていることを読み取りました。それは、あなたがたが「神学する」歩みを始めて行く

にあたって、極めて大切な基本的かつ根本的な事柄であろうと思えます。神学するとは、向きを変え生き方を変え見直し考え直すことです。それがマルコがここで伝える言葉の内実なのです。

つまり、イエス・キリストの福音とは、すでに与えられた答えではなくて、私たちに与えられた問いなのです。この問いの前に立つて、自らを真摯に問い直し、低みに立つて見なおし、考え直す。すなわち視座を転換して、新しい歩みを起こしていくことなのです。

今日私は「神とは何か」という題を掲げました。普通は「神とは誰か」というのでしよう。しかし、あえてこの問いを立てたのは奇をてらつてのことではありません。神学するとは、この問いの前に立つことなのだと言いたいのです。

「神とは何か」という問いに、正統的と言われてきているキリスト教信仰は次のように答えるのでしよう。

神は唯一であり、絶対他者

であり、創造者にして超越者として創造の初めから終末の終わりまでを救済史として、この歴史と世界を支配し導き、しかも人格神としてこの歴史と世界に介入することもする存在であると。そして、その救済史の真ん中に、決定的な神の介入と救済の出来事、人間の罪を贖うゆるしの出来事として、イエス・キリストの十字架が立っているのだと。

しかし、「神とは何か」という問いの前に立つとは、キリスト教信仰が自明の真理だとしてきているこれらの事柄を、何度でも問い直し見直し考え直してみるということなのです。

神は唯一であると言うが、それはどういう意味で言われているのか。キリスト教が正典とする旧約聖書には、はっきりと、われわれにとつての神はヤハウェしかいないが、他の人々にはそれぞれの神がいると言っているのではないか。神が唯一であるとは、神の存在が唯一であるというのではなく、神との関係が唯一であると言っているのではないか。神の存在が唯一であるというように、存在論的な唯一神信仰を持つ排他性や、それゆえの多神教や自然宗教への暴力性を、考え直して見なくては良いのだろうか。

神は絶対他者であると言う

が、それはどういうことか。対を絶する他者とはそもそも言葉の矛盾ではないのか。対を絶するならば、もはや他者とは言えないのではないか。他者と言うなら、自己と相對する者だから他者なのであって、対を絶するなら、もはやそれは他者とは言えない。従って、神とは他者ではなく自己として、すでに私たちのただ中に生きて働いているその働きそのものことなのではないか。イエスが神の国はあなたがたのただ中にあると言っているのは、そういう事態を指しているのではないか。

救済史とはなにか。創造から終末に至る一直線の時間で歴史を捉えるのは、果たして問題なしと言えるか。世界史はむしろ円環的に進んできているのではないか。創造から終末へと一直線に突き進んでいく歴史の捉え方は、それを妨げるものは邪魔ものとして許さず、暴力的に排除する問題を孕んでいるのではないか。

終末は必ず来ると言うが、これだけを見ても、聖書自体が多様であり、ヤハウイストもコヘレトも終末はないと伝えているのではないか。ヤハウイストは洪水物語の後に、もはや終わりは来ないことを語り、コヘレトは「かつてあったことは、これからもあり、か

つて起こったことは、これからも起こる。太陽の下、新しいものは何一つない」と言っ
て、そもそも終末は来ないこ
とを語っている。終末が来る
と言うなら、それをもたらす
のは、神ではなくて、むしろ
人間自身ではないか。神では
なく人間こそが、終末をもた
らす歩みを積み重ねて来てい
るのではないか。

イエス・キリストの十字架
は全人類の罪を贖う贖罪の出
来事だと言うが、現代新約聖
書学の知見として、「イエス・
キリストはわたしたちの罪の
ために十字架の上で死んでく
ださった」という言い方は、
ただの一度も見いだせない
という実証を、どう受け止める
のか。

聖書は一貫して、イエスは
十字架にかかって死んだとは
言わず、十字架につけられて
殺されたと言っている。なら
ば、なぜイエスは殺されたの
かを問わなくて良いのか。そ
の問いこそが、十字架とは何
かを問う本質的な問いなの
ではないか。

イエスは神殿宗教を批判し、
神の国はいまここにあると宣
言し、神は悪人にも善人にも
太陽を昇らせ、正しい者にも
正しくない者にも雨を降らせ
てくださると言っ、応報原
理を完全に否定克服した。そ

うして神殿宗教支配体制の中
で最も排除され周辺へと押し
やられ、不浄とされた人々の
ところへと出て行って、まさ
にイエス自らが低みに立って
見なおし、すでにいまここに
働いてある神のはたらきに信
頼して、彼らとの歩みを起こ
したので。

それは正統的ユダヤ教の支
配層にとつては、受け入れ難
くゆるし難い言葉と振る舞い
であった。だからこそ支配者
たちに仕組まれて、ローマ皇
帝への反逆者として十字架に
つけられて殺されて行ったの
である。

十字架をただただ全人類の
罪を贖う贖罪の出来事として
しまうことは、イエスが何を
なし、何を語ったために殺さ
れたのかという、事柄の内実
を不鮮明なものにしてしま
うのではないか。

教会とは何か。教会は救済
の機関だと言うが、教会の使
命とは、神と世界の間に立っ
て世界を神へ導くというより、
むしろ世界のただ中であつて、
神が世界に対して行う「神の
宣教」に参与し、「神の宣教」
に仕える働きを固有の使命と
するものではないのか。

教会はこの世に埋没しない
共同体でなければならぬとい
言うのならば、この世に横行
している支配や分断や序列や

差別を乗り越えて、神の前で
人は人を支配することをゆる
されていけないこと、人間は全
く対等で、相互的で、かつ連
帯し合う者同士であるという
価値を実現すること。それこ
そが、この世に埋没しない
この世に問いを発信し続ける
共同体としての教会の使命な
のではないか。しかし、現実
には教会の中で支配や分断が
行われ、序列や差別や排除が
行われている現実があるでは
ないか。

教職とは何か、信徒とは何
か。先に行われた農伝シンポ
ジウムで、カナダ合同教会元
宣教師のR・ウイットマー氏
からは、教職と信徒の別はない
ことを学びました。カナダ合
同教会のどの教会の週報にも、
そのトップにはMinisters All
of Us と書かれている。すべ
ての者はミニスターなのだ、
そしてミニスターとは「仕え
る人」を意味するのだと教え
られました。Ministers All
of Us とは、われわれはすべ
て互いに仕え合う者たちです
という信仰の告白であり信仰
の表明なのです。それが、カ
ナダ合同教会の職制について
の基本的な考え方であること
を学びました。これは、日本
基督教団の職制を根本的に見
直し考え直すための、大切な

問いを発信しているものであ
ると考えさせられます。
農伝は昨年度からカリキュ
ラムを新しくし、教職養成に
一本化してきた神学教育の歩
みから根本的に舵を切つて、
信徒に開かれた神学校になつ
ていきたいと考え、新しい歩
みを起こしました。神学校と
は、牧師になろうとする人だ
けが学ぶところではありませ
ん。教職と信徒の別なく、わ
たしたちは互いに仕え合うミ
ニスターとして、ミニスター

新任講師紹介



田中健三

昨年四月に高柳校長より急
遽お電話をいただき、体調を
崩された井上大衛先生のピン
チヒッターとして新約聖書を
担当しています。代打の予定
でしたが、今年度も引き続き
担当することになりお世話に
なっています。
私は大学卒業後、無教会の
高橋三郎先生が責任を持たれ
ていた集會に連なるようにな
り、今に至っています。クリ
スチャンホームではなく、友
人にクリスチャンがいたわけ

になるべく、ここで、私たち
の向きを変え視点を變えて、
見直し考え直して、新しい歩
みを起こしていく者になりた
いと、そのように折り願つて
いる者であります。
「神とは何か」。この根源的
な問いの前に立って、新入生
と共に、切磋琢磨しつつ、試
行錯誤しつつ、共に育つ神学
教育の歩みを、いま再び、新
しく始めて参りたいと願つて
おります。
(二〇一七年度入学式)

でもなかったのですが、親が
持っていた矢内原忠雄『キリ
スト教入門』という本を家で
手にして読んだことが一つの
きっかけとなり、試しに日曜
の礼拝に参加したところ、「こ
れは本物にちがいない」と直
感し、徐々に信仰を学んでい
ったというところから。
その後、八年間勤めた石油
会社を退職し、アルバイトを
しながら、日本聖書神学校で
四年間学び、卒業後東京大学
大学院で大貫隆先生のご指導
を受けながら、新約聖書を学
びました。
現在は農伝の他に日本聖書
神学校、大学、無教会研修所
で非常勤講師をしています。
私の知っている農伝の卒業
生や学生は、私たちを取り巻
く様々な問題と自分なりに真

撃に対峙する姿勢が特徴的であり、そのことに私は敬意を抱いています。私も農伝で学ばされることが多くあります。

私自身の最近の関心は、「キリスト教の将来性」です。現在キリスト教がある種の行き詰まりにあることは、いわゆるキリスト教国と呼ばれる西洋だけでなく日本でも言えることです。それをどういう風に理解していくかということ

聖書を学んでわかるのは、「人間の限界と神の力」です。聖書とて時代的制約の中で記されたものですが、それでも時代を切り開く働きがその中に記されています。

現代に生きる私たちは、時代の閉塞感とキリスト教の行き詰まりをどのように突破していくのか、農伝の皆様とも共に考えていくことができばと思っています。

またその事に付随することとして「教会とは何か」ということも当然関心があります。私自身無教会で信仰を養い、教会の牧師養成のための神学校で学び、多くの教会の方々に友人を持つ者として、必要に迫られた課題です。

農業をしながら神学を学ぶという素晴らしい神学校の一端に加えられたことを感謝しています。



西村 大介

今年度みなさんと一緒に社会学を学ぶ、西村大介です。一九四七年一月生まれ、毒っぽいサソリ座です。肩書はフリージャーナリスト。物語も書いているから物語作家というのも肩書きかな。

現在、月の半分は神奈川で、半分は南会津で、NPOなどいろいろな活動をしています。大学では社会学を学びました。政治、経済、歴史、文化、思想、生活様式、制度、さまざまな角度から社会のあり方を研究、提言する学問ですね。専門は一八世紀フランス啓蒙思想と複合文化社会におけるコミュニケーションです。大学を出て、一九七一年からおよそ四〇年間NHKで番組制作ディレクターとして仕事をしました。国際報道、災害報道、環境番組、あとラジオドラマも担当したんです。

一九八九年一〇月サンフランシスコで震度七の地震が発生、すぐ現場に飛んで一週間ぶっ続けて放送したこともあります。人使いの荒い会社ですべてが出たとこ勝負でした。特派員業務もしましたね。

二年間オーストラリアのメルボルンで仕事をしたので。この時は広すぎて羊がどこにも見えない開拓牧場とか、釣り人を襲うクロコダイルがうじゃうじゃいる熱帯の河とか、まるで日本とスケールの違う取材に明け暮れました。

外国で生活している人な話を聴くと、ああ、こんな物差しで、生活文化の中で暮らしているのか。大切にしているものがこれほど違うのか、と改めて教えられます。それは逆光にすかして、わたしたちの生き方、暮らしを見ることでもあるんですね。

日本が直面している問題は世界の問題で、世界が直面している問題は日本の問題でもあります。ですから取材体験も含めて、みなさんと一緒に、わたしたちが生きている現代社会の現状「いま」を学ぶ。そんな授業をしたいと思います。話の中心なんか記憶しなくていいんですよ。それより心に響くテーマを見つけて、自分だったら何ができるのかを、ぜひ考えてください。

現在日本基督教団秦野西教会の会員です。教会に通い始めたのは高校生の時で、二一歳のイースターに、東京杉並区の教会で有賀豊二先生から洗礼を受けました(後に学生結婚する当時のガールフレンドも一緒でした)。くしくも高柳富夫先生と同じ日です。好きな言葉は「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとするところだからである。すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさい」壁にぶつかるたびにこれで立ち直ってますね。どうぞよろしく願います。



堀江 有里

ごあいさつ
——京都から来ました。

今年度、非常勤講師としてお世話になっております。すでに二ヶ月の時間が経ち、週一回、野津田の自然に触れ、出会う人びとの背景が垣間見える議論のなかでも新鮮な時間をいただいています。担当講義の「実践神学特講I・II」では、昨年度までのご担当者・大倉一郎さんの内容を引き継ぎ、「解放の神学」をみなさんと一緒に考えています。

とはいえ、わたしのほんとうの(?)専門分野は社会学です。前職は、京都にある公益財団法人世界人権問題研究

センターで専任研究員として、また、関西のいくつかの大学でジェンダー論や社会学の講義を担当してきました。書いてきた論文テーマは、社会問題論やアイデンティティ論など。まとまったものとしては『レズビアン』という生き方——キリスト教の異性愛主義を問う(新教出版社、二〇〇六年)、『レズビアン・アイデンティティーズ』(洛北出版、二〇一五年)などです。

実践と理論をむすびつけるため、キリスト教をフィールドとするものも扱ってきましたので、最近「クイア神学」を名乗ってもいます。さまざまに解釈のある分野ですが、ひとことではいえば、性をめぐる(あたりまえ)を問う神学。わたしが考える「クイア神学」は、キリスト教がもちつづけてきた性別二元論や異性愛主義というモノの考え方を問う作業です。そこでは、いわゆる教会の「伝統」と呼ばれるものが、歴史の途中で、すでもってきてしまった性の価値観を問う作業が必要になってきます。

多くの「解放の神学」の流れは、ジェンダー/セクシュアリティの視点がほとんど欠落しています。性別二元論や異性愛主義を前提とした「男性中心主義」から自由になる

ことができないまま、です。同時に、いわゆる「西洋」中心のモノの考え方から、イエスに立ち返り、よりよいキリスト教の「本質」を見定めようと努力してきましたがそこにも問い直すべき点があると考えています。

わたしが大切にした視点とは二つあります。まずは、ジエンダー／セクシュアリティの視点を大切にしながら「解放の神学」を考えていくこと。もうひとつは、よりよいキリスト教の「本質」を探そうとする前に、その護教的な態度

「新人生紹介」



下園 昌彦

私はいま、小鳥たちの美しいさえずりと、やわらかな風につつまれて、緑深き学び舎で学んでいます。

教室での本や教科書を通しての授業はもちろん、農業実習や黙想の時間、週に二回の学内礼拝などが、さまざまに「気づき」や「体験」を与えてくれ、ここで過ごす時間

を「禁欲」し、キリスト教が育んできてしまった「罪悪」の部分をも、きつちりとみつめていくことです。

一〇代終盤から京都で三〇年間の生活を積み上げてきました。春から日本基督教団神奈川教区の寿地区にある、なか伝道所の主任牧師として招聘していただきました。一〇代を過ごした神奈川に戻り、まだまだ戸惑いや不安が大きい日々ですが、寿地区でたくさんの方の元気をもらっています。一年間、よろしくお願ひいたします。

丸ごとが、大切な「学び」なのだ実感しています。

十八のときに受洗したものの、次第に教会から足が遠のき、気がつくとも目の前の仕事に汲々とする日々に入り、挙げ句、その仕事をも失うという体験のなか与えられた、メタノイアという言葉。

この言葉が、この場所に私を連れて来てくれたのだと感じています。一過性のもの、頭だけのものとしてのメタノイアではなく、生涯をかけて、心と身体と魂、すべてを通してのメタノイア。その出発点として、農伝での学びが始まったのだと、信じています。神様。あなたの恵みに感謝いたします。



横内 美子

わたしは信州の山里に暮らしながら、松本教会で受洗させて頂き、教会生活を送る中様々な出来事を通して、農村伝道神学校の基礎コース二年間の学びを与えられたのだと思います。自給自足の田畑を持つ者として農とキリスト教を鑑みたいと思っていました。これは一つ目の動機で、今までの生活の場と非常に近い環境で農業実習を通して体で確かめながらの神学は今すでに始まっています。

二つ目はフリーピンのスラムの貧困を見た事がきっかけとなっています。キリストの平和とは何かと考えるを得ませんでした。漠然とした疑問に所在を与えたものは解放の神学でした。イエスに今ここで再び出会ったことに感謝と同時にイエスに向けて柔らかいアンテナを張って大切に学んでいきたいと考えています。

◆四月五日(水) 第六九回入学式。二名入学。

- ◆四月六(木) 始業講演… 西村大介講師
- ◆四月七日(金) 坐禅指導… 佐藤研講師
- ◆六月六日(火) 第三八回戦争責任シンポジウム… 講師 戒能信生牧師。テーマ…「第二次世界大戦下の日本基督教団成立と各個教会」
- ◆今年度、明治学院大学キリスト教研究所主催「アジア神学セミナー」受講を農伝アジアキリスト教史単位認定する提携を結んだ。

理事・評議員会報告

二〇一七年度第一回理事会・評議員会が五月三〇日に開催された。

鶴川学院院長の職を本年四月一日に遡って廃止することにした。組織運用上これが有用に働いた時期もあったが、現在はその必要性が解消している。関連規程を変更した。

農村伝道神学校の次期校長に、R・ウィットマー氏を選任した。同氏は、カナダ合同教会元宣教師、道北センター前館長、名寄教会協力牧師。

大澤錦一評議員が、五月三〇日付で評議員を辞任された。学院全体の会計事務や規程整備、また神学校本館建築にあたって多大の貢献をされた。

本年三月に理事・評議員であった中平望氏が逝去された。

二名の欠員となるが、本年十一月開催予定の理事会・評議員会で補充する予定。(書記 横野朝彦)

お知らせ

- ◇七月三日(月)～四日(火) 神学科同窓会総会。農伝にて。
- ◇七月五日～八月二日。玉山神学院より二人の学生を迎えて交流プログラム。
- ◇七月一二日(水) 午前一時～午後三時。修養会。
- ◇七月一二日(水) 午前九時～午後三時。修養会。
- 講演…徐正敏氏(明治学院大学キリスト教研究所所長) テーマ…「アジアの状況神学」 公開です。聴講無料。
- ◇同日午後五時。玉山神学院学生歓迎会。参加費千円。
- ◇七月二五日(火)～二八(金) 集中講義…日本宗教学(戒能信生講師) 聴講申込は事務室まで。一日三千円。昼食持参。

農村伝道神学校
 〒195-0063 東京都町田市野津田町 2024
 Tel 042-735-5775 Fax 042-735-5711
 Eメール : noden@pony.ocn.ne.jp
 ホームページ: http://www.noden.server-shared.com
 振替番号
 農村伝道神学校 00160-6-18485
 農村伝道神学校後援会 00120-6-24418